

〈研究論文〉

地方 X 校における国際バカロレア (IB) 修了生の  
進路選択に関する研究

— ローカリズムを視点として —

江 幡 知 佳

## 地方 X 校における国際バカロレア (IB) 修了生の 進路選択に関する研究

—— ローカリズムを視点として ——

江 幡 知 佳

### 1. はじめに

近年の日本における高等学校（以下、高校）教育改革の一つの手段が、国際バカロレア (International Baccalaureate: IB) ディプロマ・プログラム (Diploma Programme: DP)<sup>①</sup> の導入・実施である。具体的には、2010年代以降、政策的に IB の普及が推進され<sup>②</sup>、私立高校に加えて、東京都、高知県、札幌市等では公立高校の「グローバル化」や「カリキュラム改革」のために IB が導入されている (岩崎 2018)。IB の履修・修了は、世界的に多くの大学によって認知されている後期中等教育修了を示す資格 (IB Diploma: 以下、IB 修了証) の取得につながる。ゆえに、日本の高校で高校卒業資格に加えて IB 修了証を取得することは、生徒にとって、進学先の選択肢が増えるといったメリットがあるようにも思われる。

だが、進路選択の過程で、IB を履修し IB 修了証を取得することに対して、生徒は果たしてメリットばかりを見出しているのだろうか。あるいは、都市部と地方とで、そのメリット (デメリット) の見出し方に差があるということはないだろうか。

本稿は、日本の地方<sup>③</sup>に位置する IB 認定校である公立 X 校で学んだ IB 修了生が、いかなる過程を経て進学先の決定に至ったかを描く。その作業を通じて、IB 修了生の進路選択過程における「ローカリズム」(中村 2010) の影響を探索的に明らかにすることを目的とする。本稿の論点は以下のとおりである。地方の IB 修

了生の進路選択においては主観的な地域感覚＝ローカリズムが影響力をもつ。具体的に言うと、地方で学ぶ彼らのなかには、海外大学で学びたいという憧れや目標の芽生えとともに、地元にある選抜性の高い大学を目指すという志向性がみられる。結果として彼らは、IB を活用した進学を肯定的に捉えられるとは限らない。なお、本稿では、河原 (2017) を参考に、ローカリズムを〈進学希望地域〉の範囲に関する主観的認識を指すものとする<sup>④</sup>。

次節では、IB 修了生の進学に関する先行研究の検討を行い、本稿の位置づけを示す。

### 2. 先行研究の検討

日本における IB 修了生の進学を扱った先行研究はほとんどなく、渋谷 (2015: 2016) や福嶋・江里口・飯野 (2019) の研究が数少ない例と言える。渋谷 (2015) は、IB 認定校 7 校の学校管理職に対して行ったインタビューの結果に基づき、「IB 生は往々にして、英語力や IB での学びが高く評価されて、国内でも偏差値の高い大学に合格していく」という声が複数聞かれたことを報告し、「少子化や大学入試の多様化に加え、もっか文科省が大学に IB 入試を働きかけていることから、今後、IB 生は国内での進学でも有利になることが推測される」(渋谷 2015: 9) と述べている。加えて、渋谷 (2016) は、IB 認定校 8 校において学校管理職や生徒、教師を対象に行ったインタビューの結果に基づき、次のことを明らかにしている。すなわち、①家庭の経済状況等が海外大学進学を阻む大きな壁になるゆえに IB 生の選択肢は

単純に増えているわけではない、②日本の大学が実施しているIB特別入試（以下、IB入試）は出願要件の高さや出願時期のミスマッチ等により使いにくいと認識され、ゆえにAO入試〔＝現総合型選抜〕や推薦入試〔＝現学校推薦型選抜〕を利用するIB生が数多くいる、③それらの入試を受験する場合でもIBカリキュラムの課題論文（EE）<sup>65</sup>や課外活動（CAS）<sup>66</sup>等がアピール・ポイントになるため、結果として一般入試では入れない高いレベルの大学にIB生が入る場合もある。

その一方で、福嶋ほかは、IB認定校（3校）の高校3年生7名を対象に実施したインタビューの結果に基づき、「IB特別入試を導入する大学が増加している今日においても、国内大学への進学を志望する生徒にとっては、依然として志望大学や学部への入学が円滑には行われていない現状」（福嶋ほか 2019：38）があると指摘している。具体的には、IB修了生の受け入れを行っている大学・学部の少なさ、あるいは、大学出願とIBの最終試験<sup>67</sup>の時期の重なり等により、「志望校の受験を諦めた者や、推薦入試から一般入試への切り替えを強いられた者がいた」（福嶋ほか 2019：38）ことが報告されている。

以上の検討から、日本におけるIBを活用した進学の有利／不利をめぐっては、先行研究の間で立場（見解）が分かれていると言える。それらの先行研究に対して、本稿は、ローカリズムを視点とすることによって新たに見えてくるIBと進学をめぐるといえる実態があるのではないかと、いうことを提起したい。

IBは元々、国際的に移動する子どもが多く学ぶインターナショナルスクールによって、国境を越えた大学への接続を可能にすべく開発された（渋谷 2015）。しかし、英国で国境を越えないIB修了生が増加していることを花井（2016）が指摘しているように、現在、その教育対象には、国際的な移動を経験せず特定の国で育ち、大学進学までを経験するものも含まれている。日本においても、現在59校のIB（DP）認定校があるが<sup>68</sup>、そこで学ぶ生徒の一定数は、

日本、さらには日本のなかの特定の地域で育ってきたものと考えられる。このような背景は、生徒がIBを履修し進路を選択する過程で、一定の影響をもつのではないかと。

このような仮説に至った背後には、進路選択と地域をめぐるといえる先行研究の蓄積がある。例えば、吉川（2001）は、それぞれの地方の出身者が、アカデミックな進路選択とは別次元のものとして、自らの地域移動について選択していく進路の流れ（＝ローカル・トラック）があることを指摘している。加えて中村は、「高校生の立場に立って考えてみた場合、進学はしばしば教育の選択だけではなく生活地域の選択にもなっている」（中村 2011：48）と指摘し、大学進学をする際には、誰しもがなんらかの地域的選択をしており、ゆえに上記の吉川が提起したローカル・トラックという見方は、地方だけあるいは女子だけでなく、都市部や男子にもあてはまると指摘している。さらに、中村（2010）は、都市部進路多様校の高校生を対象としたインタビューおよびアンケートの結果に基づき、高校生が狭いローカリズム（地理的に移動可能と意味づける範囲）をもち、狭いローカリズムは就職において強く働き進学によって修正される可能性があることを指摘している。

進路選択と地域をめぐるといえる以上の先行研究を踏まえるならば、IB修了生が進路選択をする際にもローカリズムの作用がみられると仮定できる。そしてその作用を等閑視することは、IB修了生の進路選択の実態を捉え損ねることにつながるのではなかろうか。このような問題意識から、本稿は、IB修了生はローカリズムをいかに維持あるいは更新しながら、進路選択を行っているかを描く。その作業を通じて、IB修了生の進学をめぐるといえる先行研究に新しい知見を提示することを試みる。

### 3. 研究方法

次節以降は、筆者ら<sup>69</sup>が実施した、地方に位置するIB認定校X校のIB修了生5名および進路指導を担当する教員2名への半構造化インタビューの結果に拠る。インタビューは、筑

波大学人間系研究倫理委員会の審査を経た上で実施した（課題番号 筑 2020-108 号）。インタビュー（質的研究）の方法をとった理由は、進路選択をするもの／援助するものの主観的認識を捉えることを試みるためである。IB 修了生の募集方法として、筆者らがこれまでの研究活動を通じて親交のあった X 校の S 教諭を通じて、2020 年度に X 校を卒業した IB 修了生に研究参加を依頼し、その内 5 名から協力を得る手続きを経た。教員についても、S 教諭に本調査の趣旨を説明し、研究参加に適した教員 2 名を紹介してもらう手順を経た。IB 修了生に加えて、進路指導を担当する教員にも話を聞いた理由は、「地方からの大学進学を高校教育の側から分析するにあたって、重要になるのは進路指導」(上地 2019: 73) であるとの指摘がなされているからである。

また、本来であれば、論文中で X 校の詳細（開校年度や IB 導入年度、位置する自治体の規模等）を記すことが望ましいと思われる。しかし、日本においては未だ IB 認定校数が限られているゆえ、匿名性担保のため、X 校に関する情報の記載は本稿において最低限にとどめる。本稿のテーマについて解釈する際に必要な情報は以下のとおりである。X 校は入学時に選

抜を伴う公立中高一貫校であり、生徒は全員、中 1～高 1 の 4 年間は IB 中等教育プログラム (Middle Years Programme: MYP) を履修する。高 2、高 3 の段階における IB (DP) の履修は任意である。また、IB (DP) の履修を選択した生徒は、IB (DP) の 6 科目のうち英語 B を含む 2 科目以上を英語で受けることとなる (X 校パンフレットより)<sup>10)</sup>。

インタビューは、2021 年 3 月～5 月に実施した。IB 修了生にとっては大学等に入学した時期、教員にとっては生徒を送り出した時期にあたる。半構造化インタビューの実施にあたり、IB 修了生には、IB を選択した理由／大学進学の希望／進路選択に関して感じた困難／高校での進路指導／保護者や友人からの進路に関するはたらきかけ等に関する質問項目を用意した。教員には、X 校における IB 履修生に対する進路指導の現状と課題／IB 履修生の進路選択の阻害要因等に関する質問項目を用意した。IB 履修生に対しては個別に話を聞き、教員に対しては集団インタビューの方法をとった。インタビューは、インタビューの希望する日時に、新型コロナウイルス感染症の流行に鑑み Zoom を用いて実施した。1 名 (回) あたりの時間は 45～66 分であった。インタビューの

表 1 インタビューー (IB 修了生) 一覧

	性別	高校卒業までの居住地	進学先	調査日	インタビュー時間
S1さん	男	～2歳 東京都、以降A市	A市内B大学	2021/4/14	45分
S2さん	女	A市	県外の私立大学	2021/4/18	54分
S3さん	男	A市	A市内B大学	2021/3/29	53分
S4さん	男	A市	県外の専門学校	2021/4/24	66分
S5さん	女	生まれのみA市外、以降A市	A市内B大学	2021/4/8	49分

出典：筆者作成

表 2 インタビューー (教員) 一覧

表記	性別	X校における役割	教員歴	X校での教員歴	調査日	インタビュー時間
T教諭	男	進路担当部長	18年	3年	2021/5/26	58分
U教諭	男	DPコーディネーター (2020年度)	12年	7年		

出典：筆者作成

許可を得た上で、インタビューの内容は全て録画・録音および文字化した。

録音・録画データは、文字テキストデータへと変換し、分析の素材とした。分析は、佐藤(2008)を参考にしつつ、以下の手順で行った。まず、データ全体に目とおしながらオープン・コーディングを行い、データの傾向や特徴を掴むことを試みた。その後、データの中から、IB修了生の場合には進路選択(意思決定)の実際やそこに至るまでの過程に関する認識が述べられた部分を、教諭の場合には進路指導やIB修了生の進路選択に関する認識が述べられた部分を取り出し、質的データ分析ソフト(MAXQDA 2020)を用いて焦点的コーディングを行った。

以下、X校で学んだIB修了生はローカリズムをいかに維持あるいは更新しながら、進路選択を行ったかを探索するため、当事者たちの語りを分析、記述する。その際、氏名は仮名とした。また、引用する語りには、個人情報保護のためおよび読みやすさを考慮して、内容が変わらない範囲で加筆・修正を加えた。引用する語りに引用者による補足を加えた場合、〔 〕内に表記した<sup>(4)</sup>。

#### 4. X校におけるIB修了生の進路選択

本節では、X校で学んだIB修了生の進路選択過程について、X校入学前(小学校段階)からX校卒業時(大学等進学時)まで順を追って記述する。なお、インタビューの概要は表1、表2のとおりである<sup>(4)</sup>。

##### 4.1. X校への入学動機

彼らはなぜ、中学受験を経てX校に入学したのか。X校への入学動機について、彼らから語られたのは、親からの勧めという受動的な契機と、反対に、課題探究的な学びを求めるといった主体的な判断であった。

前者に関して、複数のインタビューがX校への入学に至った契機として親からの勧めを挙げた。例えば、S1さんは、両親から、理系に力を入れた中高一貫校があり高校受験がない

ため楽ではないかという勧めがあったと語った。S5さんも、親からX校の紹介があったことを回顧し、S2さんは、両親からの勧めがX校入学の最も大きな理由であったと述べた。

ただし、たとえ親からの勧めが契機であったとしても、インタビューはX校へ入学することに対して彼らなりの目的を見出していた。インタビューから語られた目的は多様であったが、①X校の教育の特色に関するもの、②小学校段階の経験への意味づけに関するもの、③進学(受験)を見据えたものに分類できる。以下、それぞれの目的について説明する。

第一に、インタビューは、X校入学以前に説明会への参加などを通じて、X校の教育の特色に魅力を感じるようになった。では、X校の教育の特色は、具体的にどのように捉えられていたのか。この点について、まず、「課題探究的な学習」(S2)、「受け身の授業ではなくて、グループディスカッションなどが多くて、体系的な学びができる」(S3)、「探究的というか、主体的な学び」(S4)といった表現や語りに見られるように、アクティブな学びという捉え方を指摘できる。また、理数系に力を入れた学校であるという捉え方(S1、S4)や国際的に活躍できる生徒の育成を重視しているという捉え方(S2さん)から、X校に魅力が見出されている場合もあった。

第二に、小学校段階への経験に対する否定的な意味づけが、X校への入学動機の形成につながる場合があった。具体的には、小学校に対する漠然とした「つまらないな」(S1)という思いや小学校の授業の難易度が低く退屈であると感じられたこと(S5)、受身型の授業を集中して聞いていられなかったという小学校の頃の経験(S3)などが語られた。また、小学校に「あまり馴染めなかった」(S4)ことから、環境を変えるために、居住地域の中学校でなくX校へ進学することとしたインタビューもいた。

第三に、少数ではあるが、進学(受験)を見据えた動機を語ったインタビューもいた。例えば、S2さんからは、高校受験がなく楽であるという要因が挙げられた。S1さんは、X校

に進学すると海外大学進学が実現可能になると聞き、海外大学進学に関心をもった結果としてX校に入学したという。

#### 4.2. 海外大学進学希望の芽生え

前項では、インタビューのX校入学動機を整理した。動機として、海外大学進学希望を挙げていたのはS1さんのみであった。しかし他の4名が皆、進路選択の過程で海外大学進学希望を抱かなかつたわけではない。S3さんは、中3～高1の頃を、海外大学進学について考え始めた時期として回顧した。S2さんは、X校において英語に力を入れた教育を受けたり高1の時に米国カリフォルニア州に短期留学（2週間）に行ったりする過程で、英語を流暢に話せるようになりたいという夢を抱くようになり、海外大学進学を希望するようになったと語った。高1の時に研修で初めて海外（ベトナム）を訪れる機会を得たS4さんは、事前準備でベトナムについて調べるなかで海外に興味をもつようになり、実際の訪問を通じて「海外も悪くないなっていう、世界が広がった」という。結果として、海外大学進学も視野に入れるようになった。

S2さん、S3さん、S4さんによる、海外大学進学希望の芽生えに関する語りから、彼らは教師や親からの勧めによってというよりも、X校での経験を通じて自然に（自発的に）海外大学進学に関心をもつようになったと言える。T教諭およびU教諭からも、詳細は後述するが、X校では生徒自身が進路を選択することが重視されており、明確に海外大学を推すといった進路指導はなかったと述べられた。

渋谷（2015）は、「とりわけ地方の学校では、〔IBを履修する〕生徒の主流は、日本の両親のもとに日本で生まれ育った子ども達で」（〔〕内は引用者）あり、「親には留学や駐在の経験や英語力はないが、子どもには国際的な教育を受けさせたいと希望する家庭が少なくなく、」一条校でのIB教育は、すでに国際的な教育を受けてきた生徒だけではなく、これまでそうした機会が少なかった子ども達にも、グローバル社

会で活躍する道を開くものとして、積極的に選ばれている」（渋谷 2015：9）と指摘している。本稿におけるインタビューであるIB修了生も皆、日本の両親のもとに日本で、かつ地方で生まれ育った子どもたちである<sup>(13)</sup>。S2さん、S3さん、S4さんの語りから、X校の存在は、地方で学ぶ生徒が海外に視野を広げるための機会の創出につながっているとと言える。

#### 4.3. IBコースの選択動機

前項までで見てきたとおり、インタビュー5名中4名（S1, S2, S3, S4）は、高2, 高3をIBコースで学ぶか通常のコースで学ぶかを決める段階において、海外大学進学希望を抱いていた。この希望は、IBコースの選択動機になっていた。事実、X校入学以前に海外大学進学に関心をもっていたS1さんは、「僕としてはX校に入った理由が、DP〔IB〕コースに行くためだったので、行かないと入学した意味がないと思って、迷わずに選択しました」という。

他方、インタビューからは、学びの継続性の重視という選択動機も語られた。例えば、S2さんは、中1～高1でIB（MYP）を経験した結果、主体的な学び方が自身に適していると考え、IB（DP）の学習機会を逃したくなかったためIBコースを選択したという。S3さんも同様に、IB（MYP）のような授業を継続して受けたかったと述べ、S4さんは、X校に入学したからにはIB（DP）も経験したかったと語った。

上記の4名が、ほぼ迷いなく、IBコースを選択したのに対して、S5さんは、コース選択に際し迷いを感じていた。なぜなら、IB（DP）は大変そうだという思いや自身の英語力が不足しているのではないかという不安を抱いていたからである。その上で、「個人的には迷ったときには大変な方に行こうって決めていたので」、最終的にはIBコースの選択に至ったと述べた。

実は、X校において、高2, 高3段階におけるIBの履修を選択した生徒の割合は、2020年度卒業生全体のうち1割に満たなかったという。この背景には、IB（DP）は「結構タフな

プログラム」(U教諭)であり、さらに、国内においてIBを活用した入試を実施する大学数が今後増加するか否かは不透明であることが、教諭から生徒へ伝えられたことがあった(T教諭)。生徒の側からも、国内における受験を有利に進めたいのであれば通常のコースに進んだ方が良く考えた結果、多くの生徒がIBコースを選択しなかったのではないかという語りが聞かれた(S2, S3)。

これらの語りから、X校では、たとえ学習内容が高度で学習量の負担が大きくともIBを受け続けたい、あるいはIBの履修・修了によって海外大学進学を達成したいという思いを強くもっていたごく少数の生徒によって、IBコースが選択されたと言える。

#### 4.4. 海外大学進学の実体化と断念

上記のとおり、インタビュー5名中4名が、X校への入学を検討していた段階から高1までのいずれかの時期に、海外大学進学を希望するようになった。ところが、彼らは皆、結果として日本の大学進学に至った。いかに、彼らは海外大学進学希望を具体化し、そしてなぜ、その希望を断念したのか。

S2さん、S3さん、S4さんは、X校において開催された留学説明会や民間企業による大学検索サイトを通じて、海外大学の入学要件や奨学金などに関する情報を得つつ、進学先の国等について検討を進めていった。S4さんからは具体的な国名は挙げられなかったが、S2さんとS3さんは、観光学が盛んである(S2)、あるいは英米に比べて学費が安価である(S3)という理由で、オーストラリアを進学先として考え、具体的な志望校も決定していたという。しかし、3名共に共通して、高2の冬以降新型コロナウイルスが世界的に流行したことで、進路希望を日本の大学に変更した。

コロナ禍における進路変更について、インタビューはどのように振り返るのか。S3さんは、海外大学進学のメリットとして、現地での生活とそれを通じた語学力の向上を重要視していたため、それが叶わないのであれば、日本の

大学に進学して、その後留学の機会をうかがおうと考えたと語った。S2さんも、オーストラリアの大学に進学したとしても授業形態はオンラインになるという情報を入手し、そうであるならば留学機会の充実した日本の大学へ進学しようと考えたという。

他方、S1さんは日本の大学進学に至っているが、コロナ禍が続いていた高3の夏以降に海外大学進学について具体的に検討し始め、インタビュー実施時には、同年9月に海外大学へ転学することを検討しているとのことであった。具体的な検討の過程としては、国際的な大学ランキングを参照しつつ、専攻することを希望していたコンピューターサイエンスを英語で学べる大学を探していったという。結果として、ベルギーと英国の大学に出願し、一部の大学からは入学許可が下りていると語った。

なぜ、S1さんは、日本の大学在学中に短期留学をするなどの選択肢もあるなかで、海外大学進学にこだわりをもっているのか。その理由は、S1さんの将来展望にある。すなわち、S1さんは、将来的には英国か米国の大学院に行きたい、そして、日本だけでなくより労働条件が良い国で働くという選択肢を残しておきたいと述べた。

そもそも、留学が現実のものとなるまでには、①留学に関心をもつ段階、②留学先の選択肢やそれぞれの条件を検討する段階、③出願、入学先を決定する段階という3段階が存在する(Salisbury 2009)。コロナ禍において、たとえX校での学びを通じて海外大学進学を視野に入れるようになり、上記①あるいは②の段階に至ったとしても、③の段階に至ることは、IB修了生にとって困難であったと思われる。その理由として、日本の大学に進学したとしても、短期留学等の機会を利用して様々な国の人々と関わったり英語力を磨いたりすることは可能であり、そのような選択の方が合理的かつ実現可能性が高いと考えられたからではないか<sup>40</sup>。しかし、将来的に海外の大学院に進学したい、そこに直結する大学(学士課程)で学びたい等、短期留学では果たせない動機に基づき海外大学

進学を志していた場合、コロナ禍であっても③の段階に至り、海外大学進学が実現され得ることがS1さんの事例から示唆される。

#### 4.5. 日本の大学のなかでの進学先の検討

それでは、日本の大学という枠のなかで、インタビューはいかに進学先を検討したのか。

はじめに、一貫してA市内のB大学（国立総合大学）を志望していたS5さんの事例を参照する。S5さんにとってのB大学志望は、以下の語りが示すように、小中学校段階にまでさかのぼる。

*(S5) 小学校のときにB大学ぐらいしか大学をまず知らなかったっていうところからスタートして、うちの父がB大学出身だったので、たまたま楽しそうに友達と集まったりとかしていて、最近も、昔楽しかったこととか話しているのを聞くんですけど。そういうところから、全く知らないところよりも憧れがあったのかなって思います。……中学生の時点ではもうB大学に行こうってほとんど決めた状態で。*

海外大学進学を考えたことはなかったかという質問を投げかけたところ、英語力に自信がなかったことと海外大学の学費は高額であることに言及しつつ、「結局、自分でお金を借りてでも〔海外大学に〕行く勇気がなかった」と述べた。他方、B大学のメリットとしては、自宅から通えること、英語力を伸ばすための機会が充実していること、授業が基本的に日本語で行われるため、授業の理解が言語的要因によって妨げられないこと、理系という大きな枠で入学し、2年次で学部を決定できること等が挙げられた。

さらに、S5さんに、日本の大学の併願状況をたずねたところ、B大学の他、IB入試を実施している国立総合大学3校を検討したことが語られた。しかし、出願・受験時期の問題（IBの試験<sup>(4)</sup>に向けた学習で忙しい時期とIB入試の出願・受験時期が重なる）や履修科目の問題（履修したIB科目がIB入試の出願要件を

満たさない）等により、出願には至らなかったという。その上で、B大学のIB入試（10～11月実施、翌年2月可否の確定）ならびにIBの最終試験（11月実施）の時期以降には、大学入学共通テストやB大学の一般選抜に向けた勉強に取り組んでいた経験も語られた。

IBとセンター試験（共通テスト）とはまったく異質であり、内容的にも時期的にも両立はほぼ不可能であることが先行研究では指摘されている（渋谷2016）。それにもかかわらず、B大学へのこだわりから、11月頃に共通テスト等の対策を開始した経緯は、S2さんに加えてS3さんからも語られた。

S3さんは、さらに、B大学以外に検討していた進学先として、県内にある公立C大学を挙げた。

*(S3) 祖父母の家がA市外にありまして、そこはアクセスがいいわけですね。その近くに、C大学っていうのがあるんですけど。そこが、B大学と結構、教授のやりとりがありまして、B大学から、C大学に行った人もいて、C大学からB大学の教授になった人もいて。AIとか、そこら辺のことしかやっていない単科大学なんですけれど、自分、AIについて勉強したかったのでもしB大学に落ちたら、C大学に行くのもありかなと思っていました。*

S5さんやS3さんの語りから、彼らは学びたい分野を学べることに加えて、近いことを重視し、大学を選択していたと言える。同様の傾向は、「B大学に関しては、親からIB用の入試方法があるという話を聞きまして。近いし安いし、いいかなと思って」というように、S1さんの語りにもみられた。

S1さん、S3さん、S5さんは、結果としてB大学への進学に至った。他方、県外の大学等に進学したインタビューとして、S2さんは、IB入試を実施していることとB大学では学べない分野（観光学）を学べることを理由に、県外の私立大学を第1志望とし、実際の進学に至った。



また、現在、専門学校でITの勉強をしているというS4さんは、進学先の模索過程を次のように振り返った。

(S4) 今、ここ〔所属している専門学校〕にいる理由なんですけれど、ちょっと結論から言うと、B大学に本当は行きたかったんですけど、B大学が駄目だったので、次に東京の私立大学を受けていたんですけど、その大学が、学費がちょっと高いんですね。家から行くにはちょっと厳しいっていう話になって。……で、なったときに、もう受験環境〔ママ〕は基本、全部終わっているんで、何か自分が他にできる道はないか、行く道はないかって考えたときに、ふとIT系が浮かんで。

S4さんは、希望通りの進学を果たせたとはいえない。この状況のなか、IBを選択したことをどのように振り返るのか。

(S4) 本当に複雑で、進学だけを考えたら、絶対プラスではなかったと自分は思っている。……一応、B大学もIB入試があったんですけど、理系で採っているのはたった10人とかっていう狭い枠だったので。……一般受験ってなってくると、やっぱり勉強が全然違って。……ただ、自分のスキルとか、学びですとか、こういう教育を受けてきたっていうこととか、考え方を見つけたとか、行動できるようになったとか、そういった面ではすごくプラスだったと思って。見る側面にもよりますけれど、全体的に見たら五分五分だなとしか言えないですね。

この語りから、S4さんは、IBという選択に対して、大学受験に焦点化した場合の否定的な見方とIBの履修を通じて得られたスキルや態度に焦点化した場合の肯定的な見方の両方を抱いており、総じて「複雑」で「五分五分だ」と表現している。類似の語りは、S2さんにもみられた。S2さんは、日本の大学が出願、合格のために要求しているIBの最終試験のスコア

の高さや自身が第1志望以外の日本の大学（B大学を含む3大学）に不合格であった経験などから、「自分が今までやってきたこと〔IB〕って、大学受験に向いていない」と考えていたという。しかし、大学に入学後は、「〔IBの学びは〕大学でも将来にも役立つもの」として捉えられるようになったと語った。

S4さんとS2さんの語りから、彼らは、IBに対して両義的な意味づけをしていると言える。なぜ、否定的な意味づけ、すなわち、IBを活用した進学は困難であるという意味づけはなされるのか。この点について、進路指導を担う教員の語りを参照しつつ、次項以降で考察を深めたい。

#### 4.6. X校における進路指導をめぐる葛藤

なぜ、X校の当事者たちによって、IBを活用した進学は困難であるという意味づけがなされているのだろうか。この点を探るために、本項では、T教諭およびU教諭の語りに基づきながら、X校における進路希望の傾向および進路指導の方針等について記述していく。

まず、X校における進路希望の傾向を確認する。U教諭は、X校において、理系の国公立大学を希望する生徒が多く、他方、県外の私立大学に進学する生徒はきわめて少数であると述べた。つまり、X校の生徒のなかには、地元の理系国公立大学志向が存在していると言える。

このことは、IB入試を実施している大学には地域的な偏りがあるため、IBを活用した進学を難しくする。地域的な偏りを示すデータとして、都道府県ごとのIB入試を実施している大学数を参照すると、多い順に、東京都（29校）、埼玉県等3県（4校）、愛知県等3県（3校）、宮城県等3県（2校）、北海道等12県（1校）、その他（0校）となっている<sup>46)</sup>。かつ、IB入試を実施している大学が全て理系の学部を有している、あるいは理系の学部でIB入試を実施しているとは限らない。

さらに、IB修了生が日本の大学に進学する場合、IB入試のみならずAO入試や推薦入試が利用されていることが先行研究で示されてい

るが(渋谷 2016)、このこともインタビューには当てはまらなかった。この理由について彼らは直接語っていないが、推察すると、AO入試や推薦入試は「入試の多様化」(リクルート 2009)という言葉に象徴されるように実施方法や実施時期が大学(学部)毎に大きく異なっているため、受験に至るためには教師による積極的な介入や情報提供が必要な場合が多いのではないか。他方、X校においては、「生徒自身に〔進路を〕選ばせるというところが第1の方針」(T教諭)であると語られたことから、進路選択における生徒の自主性が重んじられている。換言すると、大学入試に関する情報の提供や受験方法に関する指導等が積極的になされているわけではない。ゆえにインタビューは第1志望以外の大学の特別入試の受験にまで至らなかったのではないかと推察される。

X校の進路指導の方針は、X校の教育目標において「自立」が重要な要素になっていることと(X校ウェブサイトより)、一貫している。X校では、進路について、「ああしなさい、こうしなさいって我々〔教諭〕の方では言わない」のであり、「相談したければ、相談してくださいってというような、いつでもどの先生でも相談に乗りますよってというような」(T教諭)体制がとられている。生徒の側からも、海外大学に関する情報収集は基本的に自分1人でやらなければならない(S1)、あるいは、X校では、大学について調べなさいというよりも、将来何をしたいかを考えなさいと言われていた(S4)等の語りが聞かれた。

しかし、自主性を尊重した進路指導を行うことに対する葛藤も教諭からは語られた。T教諭によると、X校においてはIBの最終試験のリテイク<sup>(7)</sup>が認められていないため、もしIBコースの生徒が浪人することを選んだ場合には、一般選抜への切り替えを余儀なくされるという。一般選抜への切り替えというルートを選ぶことに対して、T教諭は、「僕のなかではあまり理想とするかたちではないのかな」と述べつつ、そのルートを生徒が避けられるように、進学先の選択肢を増やすような受験の方法を提

案した方がよいのだろうか、しかし、押し付けにはならないようにしたいと、悩みながら語った。T教諭は、IBを受験のためのものとしては捉えていないとも述べており、進路指導における介入の程度をめぐる葛藤をうかがえる。

また、U教諭は、X校においてIB(DP)コースで学ぶ生徒は少数であるなか、彼らに特別の方針で進路指導を行うことについては否定的であると述べた。IB入試の普及が充分ではないと感じられるなかで、学校が一定程度の情報提供をする必要はあるかもしれないが、とはいえ、「社会に出たときに、誰かが〔情報を〕提供してくれるかっていうと、それはないことが多いと思うので、そのなかで、自分自身で探し出していく力を〔X校の生徒には〕身につけてほしい」という思いを、U先生は進路指導に対して抱いている。

## 5. 考察

以上の結果を考察し、得られた知見を以下にまとめる。

第一に、地方におけるIB認定校の存在は、生徒のローカリズムを更新し得る。中村は、「進学が個人をローカルな文脈から切り離すメカニズムを内包している」(中村 2010:246)ことを指摘したが、これと類似のメカニズムが働き、地方でのIB認定校における学習機会により、生徒は、〈進学希望地域〉に海外を含み込むようになる「可能性がある」のである。このことは、IB認定校における学習機会がなければ海外大学進学を検討しなかったであろう複数のインタビューが、X校入学から卒業までのいずれかの時点で、海外大学進学希望を抱くようになったという事実裏づけられる。

ただし、ここで「可能性がある」という表現を強調しなければならない理由は、X校で、高1までIB(MYP)を履修した生徒の大多数は、その後、IB(DP)コースで学ぶことを選択しなかったことに拠る。IBコースを選択しなかった生徒たちの進路選択過程については本稿の分析の対象外である。あくまで、本稿で言えることは、地方におけるIBの存在は、一部の生徒

のローカリズムを更新し得るということである。

第二に、地方のIB修了生がローカリズムを更新し、海外大学進学を志すようになる場合、彼らの〈進学希望地域〉は、地元の大学からより広域の（日本中の）大学へ、そして世界中の大学へというように徐々に広がるわけでは必ずしもない。インタビューの語りの分析から、自宅から通学可能な範囲に選抜性の高い国立総合大学が存在する環境で育った場合、生徒のなかに、その大学への憧れが程度の差はあれ芽生え、そしてその憧れは一定程度強固であることが読み取れた。中澤（2011）は、「近くにある大学に進学する」というのは合理的な行動であり、このような傾向が出ることは全く不自然ではないと指摘している。よって、近くに選抜性の高い国立総合大学が存在するならば、その地域で育った（X校に入学するような）生徒がそこを目指すのも不自然ではない。注目に値するのが、「近くにある大学を目指す」といった傾向は、海外大学進学に関する具体的検討を経た後のIB修了生にもみられたことである。彼らは、国内であれば近くにあるB大学に進学したいといった希望をもち続けていたのである。

第三に、狭いローカリズムを保持し自立的な進路選択をする場合、現在の日本では必ずしもIBを活用した進学が有利になるとは限らない。というのも、現在の日本におけるIB入試の実施状況には地域的な偏りがみられるからである。X校の位置する県内にも、IB入試を実施している大学は現在のところB大学しかない。S5さんのように、B大学を第1志望とし、IB入試を経て本意の進学も果たすものもある。だが、IB入試を実施する大学が数多く所在する都市部（主に東京都）の大学を受験することに伴う金銭的・時間的負担の大きさは想像に難しく、加えて地元のB大学へのこだわりや自立的な進路選択が推奨される学校環境等の要因が重なり、結果として本意の進学を果たせない場合があるということもまた事実と言える。

## 6. おわりに

以上の考察に基づき、本稿では次の結論を導いた。IBを履修する過程で、生徒は、海外大学で学びたいといった国際志向を抱き得るが（ローカリズムの更新）、他方、地元にある選抜性の高い国立総合大学を目指すといった地元志向を保持する傾向もみられる（ローカリズムの維持）。コロナ禍で、IB修了生の進路選択の過程においては地元志向が強化された。しかし、現在の日本におけるIB入試の状況を踏まえると、IB修了生は、IBを活用した進学と狭いローカリズムの維持とを必ずしも両立できるとは限らない。結果として、IB修了生のなかに、進学という観点から、IBという選択を肯定的に意味づけられないものが存在している。

しかし、ここで強調しておかなければならないのは、IBの学びやそれを通じた自身の成長という観点で、インタビューは総じてIBという選択を肯定的に意味づけていたということである。また、本意の進学を果たせなかったインタビューからも、進学後、現在の環境で主体的に学びに向かっている様子が語られた。つまり、IBの成果を進学のみにも焦点化して判断することは慎むべきであろう。重要なのは、もし進学という観点から、IBを選びたくとも選べない生徒あるいはIBという選択を肯定的に意味づけられないIB修了生が一定数存在するのだとしたら、必要な制度改善があるのではないかを問うことではなかろうか。

最後に、今後の課題を述べる。実のところ、本稿の調査を実施するまで、筆者らは、IB修了生の進路選択においてローカリズムが影響力をもつことをあまり考えていなかった。IB修了証をもつ生徒は、国内外の大学を幅広く視野に入れながら進路選択をしているのではないかと漠然と想像していたのである。しかし、インタビューを進める過程で、IB修了生であっても進路選択の過程においては「実家からの近さ」といった点を重視することがあるのだと気づきを得た。この気づきを記述することで、日本におけるIB修了生の進学に関する先行研究に新たな知見を加えられるのではないかと考

え、本稿の執筆に至った。ただし、本稿は、地方に位置するIB認定校1校の当事者たちの語り依拠している。知見の一般化のためには、「別の地方ではどうなのか」を調査することが必要である。また、X校のT教諭およびU教諭の語りからは進路をめぐる生徒への関わり方に関する内省をうかがえたため、今後、X校における進路指導のあり様には変化があるかもしれない。さらに、IB入試を実施する大学数の増加といった外的な要因の変化も起こり得る。以上を踏まえた調査の継続は今後の課題とした。

## 注

- (1) 特に断りが無い限り本稿で「IB」はIBディプロマ・プログラムを指すこととする。
- (2) 「日本再興戦略-JAPAN is BACK-」(平成25年6月閣議決定)等を参照。
- (3) 本稿では「地方」を三大都市圏以外の地域を指すものとする(朴澤2014)。
- (4) ローカリズムとは、「地域」空間に付与されている意味という「地域意味」と、その意味の適用範囲という「地域範囲」から構成される分析概念である(河原2017)。
- (5) EE(Extended Essay)とは、履修した科目のなかから探究したい課題を選び、4千語以内の英語または8千字以内の日本語で論文を書く活動を指す(岩崎2018)。
- (6) CAS(Creativity, Activity, Service)とは、創造的思考を伴う芸術などの活動、健康的な生活を送るための身体的活動、および学習に有益な無報酬の自発的交流に計150時間取り組むものを指す(岩崎2018)。
- (7) IBの最終試験は毎年5月と11月に世界で一斉に実施される。この試験で一定以上の成績を収めることが、IB修了証の取得要件になる。なお、インタビューが受験予定であった2020年11月の最終試験は、新型コロナウイルスの影響で中止となった。
- (8) 文科省IB教育推進コンソーシアム「認定校・候補校」(<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/authorization/> 2022.1.18)

- (9) 本稿の調査は、令和2年度学生支援の推進に資する調査研究事業(JASSOリサーチ)「国際バカロレア(IB)履修生に対する進学支援の在り方に関する研究」の一環で実施したものである。同調査研究の代表者である菊地かおり氏と筆者(共同研究者)が共同で調査を企画・実施した。本稿の執筆は、筆者が単独で行った。
- (10) なお、X校の生徒の進路情報(入試結果)については開示されていない。
- (11) 引用箇所を含めて本稿の内容については、インタビューの確認と許可を得た。
- (12) 表2中の進路担当部長とは、T教諭によれば、学校の進路全体を預かる役割を果たす。また、DPコーディネーターは、IB本部(IB機構)とのコミュニケーション役を担う(IB機構2015)。
- (13) ただし、S1さんの父親の勤務先は領事館であり、S2さんの父親(教員)は社会人になって以降1年間の米国居住歴をもつ。
- (14) 長期留学ではなく、日本の大学に進学後に短期留学を実施する者が増加している現状を、小林(2019)は「新たな形での合理的な留学志向の誕生」と指摘している。
- (15) 5月と11月に実施される最終試験のほか、予測スコア(predicted grades)を出すための模擬試験を含む。
- (16) 詳細は以下参照。文科省IB教育推進コンソーシアム「IBを活用した入試制度」(<https://ibconsortium.mext.go.jp/ib-japan/admissions-policy/> 2022.1.18)
- (17) リテイクとは、IBの最終試験を受験し直すことである(International Baccalaureate "Assessment FAQ" (<https://www.ibo.org/programmes/diploma-programme/assessment-and-exams/getting-results/assessment-faq/> 2022.1.18))。ただしX校を含めリテイクを認めていない学校もある。

## 引用文献

- IB機構(2015)「DP:学校のための認定ガイド」(<https://www.ibo.org/globalassets/publications/guide-to-school-authorization-jp.pdf> 2021.10.30)。

岩崎久美子（2018）『国際バカロレアの挑戦—グローバル時代の世界標準プログラム』明石書店。

上地香社（2019）「地方からの大学進学における日常的な進路指導—教師と生徒の認識に着目して—」『日本高校教育学会年報』（26）、72-81。

河原秀行（2017）「ローカリズムから〈地域〉を問う—「空間」と「場所」を越えて—」『東京大学大学院教育学研究科紀要』57、271-279。

吉川徹（2001）『学歴社会のローカル・トラック—地方からの大学進学』大阪大学出版会。

小林元気（2019）「高卒後の進路における海外大学進学志向の規定要因」『日本高校教育学会年報』（26）、18-27。

佐藤郁哉（2008）『質的データ分析法 原理・方法・実践』新曜社。

渋谷真樹（2015）「一条校による国際バカロレア導入の意図と背景—学校管理職の語りから—」『国際理解教育』21、3-12。

渋谷真樹（2016）「国際バカロレアにみるグローバル化と高大接続—日本の教育へのインパクトに着目して—」『教育学研究』83(4)、423-435。

中澤渉（2011）「高等教育進学機会の地域間不平等」『東洋大学社会学部紀要』48(2)、5-18。

中村高康（2010）「都市部高校生の進路選択とローカリズム」中村高康編『進路選択の過程と構造—高校入学から卒業までの量的・質的アプローチ』ミネルヴァ書房、231-252。

中村高康（2011）「高校生のローカリズムと大学進学」『高等教育研究』14、47-61。

花井渉（2016）「イギリスにおける国際バカロレア認証に伴う資格試験制度変容に関する研究」『比較教育学研究』（52）、90-112。

福嶋将人・江里口歎人・飯野啓（2019）「高大接続と国際バカロレアプログラムの課題—日本のIBDP生の進路選択に関する一考察—」『国際バカロレア教育研究』3、31-41。

朴澤泰男（2014）「地方における高等教育機会と大学・短大進学行動—都市雇用圏を単位とした計量分析—」『一橋大学大学教育研究開発センター年報』2013、29-40。

リクルート（2009）「高校進路指導現場の困惑 リ

クルート『高校の進路指導に関する調査』『カレッジマネジメント』155。

Salisbury Mark H., Umbach Paul D., Paulsen Michael B. & Pascarella Ernest T., 2009, "Going global: Understanding the choice process of the intent to study abroad," Research in higher education, Vol. 50.

## 謝辞

本研究は、令和2年度学生支援の推進に資する調査研究事業（JASSO リサーチ）の助成を受けたものです（研究課題名：国際バカロレア（IB）履修生に対する進学支援の在り方に関する研究／研究代表者：菊地かおり）。

本稿の執筆に当たり、アンケート調査ならびにインタビュー調査にご協力いただいたX校の先生方と卒業生の皆様に、心より感謝申し上げます。

## **The International Baccalaureate (IB) Graduates' Career Decision-Making Towards Post-Secondary Education in Japanese Local X School : How 'Localism' Affected Their Choices**

Chika EBATA

The purpose of this paper is to describe the process by which International Baccalaureate (IB) graduates from Public X School, an IB World school located in a rural area of Japan, came to make their career decision towards post-secondary education, focusing on the concept of 'localism'. According to Nakamura (2010), localism is defined as the subjective sense of locality that high school students have when choosing a career path. To achieve the purpose, this paper analyzed the results of interview surveys conducted with five IB graduates and two teachers in charge of career guidance at X school. Analysis of the surveys' results revealed the following.

IB graduates, in their career decision-making, may have an international orientation, such as a desire to study at foreign universities. This suggests a renewed form of localism. On the other hand, IB graduates also tend to retain a local orientation, aiming to enter a highly selective national comprehensive university that is local to them. This implies a continuation of localism. With the COVID-19 pandemic, local orientation was strengthened in the career decision-making process of IB graduates. However, since there are regional disparities with the implementation status of entrance examinations adopting IB by universities in Japan today, it is not always possible to maintain a focused localism while entering a university by submitting an IB Diploma. As a result, some IB graduates are unable to make positive sense of their IB choice in terms of career decision-making towards post-secondary education.